アメリカのヒスパニック

―メキシコ系を中心にして―

寺本　新輔

1．はじめに

1990年代になって、にわかに活発化してきた、民族問題や移民問題を、我々はどのように受けとめたらよいのであろうか。とりわけ社会学的には、どのように捉えられるであろうか。

エスニシティや移民問題に対する社会学的研究は、実体記述的な研究が散見できるけれども、どのように理論化できるであろうか。とりわけ、1990年代、地球化社会とよばれる中で、どのようにこの現象を捉えればよいのか。

本論文は、アメリカにおけるヒスパニックを、同化や社会運動の概念を検討しながら考察することによって、この新しい課題に答えようとするものである。

2．ヒスパニックの動向

最新の1990年のセンサスのデータに基づくと、1990年３月現在、アメリカのヒスパニックの総人口は、2077万9000人であり、アメリカの総人口２億3087万人の約９％になる［United States Bureau of the Census,1991］。これは、1980年のセンサスにおいて、1460万のヒスパニックがいたことから考えると、142％増加したことになる［Acosta-Belen,1988:3］。1950年の統計からみれば、総人口にヒスパニックの占める割合は、1950年に2.7％、1960年に3.9％、1970年に5.2％、1980年に6.4％であった[Acosta-Belen,1988:11]。ちなみに、1990年のセンサスによれば、白人80.3％であり、黒人は12.1％、アジア系は 2.9％であった。

もしこのまま、合法や不法のヒスパニック、アジア系や他の移民などを、これまでのように１年に100万迎え入れるとするならば、 2020年には、ヒスパニックは約4700万人になり、総人口の15％を占めるようになり、黒人を抜いて最大のマイノリティ集団になると予測されている［Acosta-Belen,1988:3］。このこれからの移民の増加は、たとえば1986年11月６日に成立した、不法移民を制限するためのシンプソン－ロディノ法（Simpson-Rodino bill） の効果などさまざまに評価されているため[1]、ここでは即断できない。 しかし、もう一つ見逃すことのできない事実は、ヒスパニックの高い出生率である。1000人あたりの出生率は、非ヒスパニック系で14.7に対し、ヒスパニック系では25.5であり、とりわけメキシコ系は、29.6と高い［Acosta-Belen,1988:21］。

さて、それではヒスパニックとは何であろうか。定義的には、人種や国家や文化的背景により“スペイン系の遺産を持った者”と定義される ［Acosta-Belen,1988:4］。 ただし、センサスの内容そのものも、年ごとに若干変化しており、一律に定義するのは難しいようである。たとえば、ドイツ系のアルゼンチン二世は、アメリカに移民した場合、ヒスパニックと言えるかどうかなど移民問題特有の問題も残っている。しかし、その具体的内容をみてみると、かなりはっきりしてくる。

まず、メキシコ系アメリカ人、または、メキシコ・アメリカ戦争前から住んでいたチカノ（Chicano）と呼ばれる人々がいる。 彼等の多くは、アメリカの南西部に住んでいる。次には、プエルト・リコ系がおり、スペイン系、インディオ、黒人が含まれる。彼等は、アメリカ・スペイン戦争の経緯によって、生まれた時からアメリカの市民権を持っている。彼等の多くは、東部のニューヨークやニュージャージーに住んでいる。次には、キューバ系の者がおり、1959年のキューバ革命後、アメリカに移り住んだ者である。彼等の多くは、フロリダに住んでいる。最近増えたのは、メキシコ以外の中南米からの移民である。

それでは、1990年のセンサス・データによって、ヒスパニックの内訳をみると、メキシコ系1330万５千人で64％、 中南米出身者284万２千人で13.6％、プエルト・リコ系が218万で10.5％、 キューバ系が101万４千人で4.8％であり、他は143万７千人である。

それではなぜ、このようにヒスパニックが多くなったのであろうか。ここで

は、出生率の問題は別として、移民一般論の視点から考えてみたい。とりわけメキシコからアメリカへの移民については、おびただしい研究の蓄積があり、それをまとめることは、筆者の力量を越えるものであり、また本論文の目的でもない。そこでラテン・アメリカの移民そのものを研究したものではないが、移民研究の中で、グローバルな視点をもった研究として、今もっとも注目されているサッセン［Sassen,1988］の見解をみてみよう。

アメリカにおける合法移民は、1960年には26万5000人であり1970年には50万に達し、その数は徐々に増加し、1980年には全てのタイプの移民を合わせれば約100万に達する。 1970年から1980年にかけては、アジアとヒスパニックの移民が増加し、アジアは100%、ヒスパニックは62%増加した。 とりわけ韓国は412%の増加である［Sassen,1988:13］。

それでは何故このような移民が生じたかというと、これらアジアや、ラテンンアメリカ地域にアメリカなどからの資本投資があったからであり、この資本投資によって、伝統的な労働構造が破壊され，賃労働に二極分解が生じ、移民労働が生じたのである［Sasseen,1988:120］。

またそれとは反対に、アメリカは、同時に資本の大きな流入地帯であり、それはニューヨーク・ロスアンジェルス地帯に多い。これらの都市における資本流入は、二つの労働需要を生み出した。一つは、繊維産業などの衰退している産業であり、低賃金労働力を必要とした。もう一つはこれらの都市は二極分解をしており、一方では金融業などの管理職業務などの増大を生み出しているが、それは同時にクリーニングや修理、使い走りといったサービス低賃金労働をうみだしている。これら二つの低賃金労働に移民に対する需要があるというのである［Sassen,1988:158］。

要するに、サッセンの主張することは、先進国から発展途上国への資本投資は、発展途上国人口の賃労働化を生み出し、移民予備軍を生み、また、西ヨーロッパや日本からのアメリカへの資本投資は、アメリカ大都市の二極分解を生み、そこで生まれた低賃金労働に移民が吸収されるというのである。

そして、彼女自身の主張することは、世界資本主義システムにおいて国民国家の多様性は、とりわけ労働力の国際分業を通して、そのシステムの再生産を可能にし、先進国の第三次産業における移民労働者の使用の増加と、発展途上

国における、外国人および自国の労働者の第二次産業の使用は、世界的レベルでの資本の再編を反映しているというのである［Sassen,1988:52-53］。

詳細な分析は別として、世界資本主義システムの変動と、それに呼応した形でのラテン・アメリカからの移民があったのである。

３．移民の同化

同化の概念

ここではまず、同化の概念について検討する。

同化の概念の歴史的変遷について、明石［明石，1984］により整理すると、次のようになる。

その主なものは、イギリス文化優位論、るつぼ理論、文化的多元論に分けられるという。

イギリス文化優位論は、アメリカの国家を成立させたのは、イギリス的なものであり、他の移民はそれに適応しなければならないという思考形態である。しかし、これは過去の産物とだけはいえず、現在でも、ＷＡＳＰ（White Anglo-Saxon Protestant）として現在もなお、支配階級に残っている思想であることには間違いはない。

るつぼ理論は、いわばシンボル的要素が強い。アメリカがさまざまな人種や民族が溶けて混じり合っている、あるいは混じり合うべきであるというのは、今世紀初めのイギリス系ユダヤ人作家イスラエル・ザングウィルの戯曲『るつぼ』が出て以来の思想である。

文化的多元論の考えを最初に著したのは、ホレース・カレンであるとされている。アメリカに到着後、各移民グループはアングロ・アメリカ文化を受容しつつも、かれら独自の文化的遺産は失われることはない、というのがこの立場の基本的前提である。これは、るつぼというよりもモザイク的なものであり、るつぼに比していうならば、サラダ・ボウル理論とも呼ばれる。しかし、この文化的多元論も1960年代の公民権運動などによりその批判の対象になる。とり

わけ、そこで出てきた研究は、ラディカル・エコノミストと呼ばれる研究である。ラディカル・エコノミスト達が主張したのは、文化的同化理論が主張する機会の平等よりも、結果の平等であり、そして、その結果の平等を決して生まない経済的不平等の構造そのものであった。その代表的主張が、二重労働市場論であった。

経済的不平等

二重労働市場論を展開した研究者は多数いるが、その初期の代表的研究として、リチャード・C・ エドワーズ［Edwards,1975］ の研究をみてみよう。

エドワーズは先行研究であるダビット・M・ゴードン［Gordon,1972］の労働疎外の概念を踏襲した部分もあるが、より重要なのは労働市場に対する歴史分析から導きだされるアメリカの二重労働市場化である。

まずアメリカの資本主義の発達の歴史を４つの時期に区分する。まず第一の時期は、19世紀、競争的資本主義の発展の時期であり、工場の発達による熟練労働者の消滅と、それによる労働者階級の均質化が特徴としてあげられる。第二の時期は、第一の時期にみられた競争的資本主義ではなく、大企業による独占的な支配が確立しはじめる時期である。これは時期的には1890年から1920年頃にかけてのことである。この時期の特徴は以下の三つである。①家族的企業から大企業への変化。および金融支配の確立。②競争的なものから独占的なものへの変化。③独占資本と周辺的なものとの二つのセクターへの分割である。第三の時期は、この産業構造の二重化が労働市場の二重化を生み出す時期である。この産業構造と労働市場のの二重化が第四の時期に、人種と性の分割を生み出すのである。

さてそれでは、第一の時期から第四の時期に至るプロセスはいかなる理由によるものであろうか。

第二の独占資本主義確立の時期は、同時におびただしい労働闘争の高揚に脅かされた時期でもあった。第一の時期に生じた労働者の均質化による労働者の団結の強さと時代的背景は、革命の危機さえ企業家に感じさせた。この危機に対処するために企業家の意図したことは、労働者の均質化を破るために、労働

者を分割することであった。すなわち熟練労働の消滅にたいして、企業内を官僚制化し、権威関係による支配を意図したのであった。

この官僚制化とは、まず入社レベルでキャリア組とそうでないものに区別する。キャリア組は、仕事の階層（Ladder）化があり、入社してから徐々に昇進できる。また、キャリア組は企業福祉を受けることができる。これに対しキャリアの仕事で雇われない労働者－たとえば黒人や女性－は、仕事の階層化から排除されるし、企業福祉の恩恵を受けることもない。これらの事実は、黒人や女性が文化的差別を受けたというよりも、労働運動の高揚に対する企業家側の労働者の分断の手段だったということである。

独占資本の発達は、同時に産業構造の二重構造化を生み出す。一方の極には、需要の安定した大企業の独占が可能な分野があり、もう一方には、需要が不安定であったり、季節的なもの、たとえば運輸や建設業といった集中化が困難なものがある。また大企業の独占によって集中化した産業でも、下請けや外注による周辺的な産業が発生する。こうして、独占的なものとそうでないものの二重構造化が進む。以上の内部労働市場の事情と、産業構造の二重構造化が、労働市場の二重構造化を生み出すのである。

エドワーズは、黒人と女性を主に分析の対象にしたが、これを移民に応用したのがピオリー［Piore,1979］であった。ピオリーは、アメリカの労働市場が大企業中心の基幹的産業と中小零細企業中心の二次的産業に別れていることを指摘し、移民労働者の多くが二次的産業に集中していることを指摘する。とりわけ1960年代の公民権運動の過程において次第に新規の追加労働力を確保することが困難になり、移民労働者でこれを補充せざるをえなかったというのである。実は最初に引用したサッセンは、これらの研究の延長にあるといえる。

さてこれらの研究は、文化的同化を否定するものであった。どれだけ同化を主張したところで、経済的不平等は、その構造のなかで温存され続けるのである。

メキシコ系移民の同化

さて、それでは、現在のメキシコ系移民の同化はどうであろうか。ここではポルテスとバッハの研究をみてみよう。ポルテスとバッハは、1973年から1974年にかけて、合法的にアメリカに入国したメキシコ系移民を追跡調査した。彼等のアメリカの職業は、農業9.7%、建設業5.8%、永続性のある工場労働20.4%、非永続的な工場労働18.5%であった［Portes & Bach,1985:242 ］。その他各種データを見ても、メキシコ系はいわゆる二次的セクターに多く就業している。

それでは、二次的セクターに就業する者が多いという経済構造を明らかにしただけでよいのだろうか。すなわち、低い経済的地位を構造的に上昇させるだけで、すべての問題は解決されるのだろうか。どれだけ、二次的セクターに多く就業しているとしても、我々はその社会的適応に関心がある。彼等はホスト社会にどれだけ適応しているであろうか。

第一次社会関係がメキシコ人かメキシコ系アメリカ人である者75.1%、アングロ系である者2.4%、 混合型が21.1%である［Portes & Bach,1985:176］。その他のデータを見ても彼等は、社会的に適応しているとは言い難い。 それでは、経済主義者の言うように、 彼等が経済構造の中で下位階級であるから、彼等の社会的適応が困難なのであろうか。それはそうとはいいきれない。実は言葉の問題が、メキシコ系に限らずヒスパニックには大きいのである。

1976年の時点で、家庭での言語がスペイン語である者83.1%、英語である者10%である。1979年にも調査は行われたが、結果はあまり変わらない。1979年の時点で、英語を全く知らない、あるいは少ししか知らない者は、72.6%にのぼるのである。つまり圧倒的多数は、スペイン語を日常用語としている。彼等は、出身地は別として、強固なスペイン語集団として存在している。マス・コミとの接触度では、新聞がスペイン語である者42.8%、英語が42.8%。ラジオは、スペイン語である者42.2%、英語が26.1%である［Portes & Bach,1985:174-175］。

ここに社会的適応に対し、言葉の問題がでてきた。適応と同化とは類似した概念でもある。社会的適応をみても、社会経済的地位とは別に、言葉という重

い文化的問題があったのである。それまで文化的同化として問題とされたのは主に宗教であった。

たとえば、ハーバーグの研究では、移民とその子孫には、宗教が重大な影響があるとした［Herberg,1955］。また、グレイザーとモイニハンの研究によると、エスニシティから母国的要素が脱落するにつれ、宗教がアメリカ社会を構成する主要集団の規定要因になるとして、カトリック、ユダヤ人、白人プロテスタント、それに黒人が、エスニック・グループとして登場するとした［Glazer & Moynihan,1968=1986］。しかし、ヒスパニックは、それまでの文化的同化では考えられもしなかった問題をもっている。すなはちグレイザーとモイニハンのいう、母国的要素である言葉が脱落しない可能性をもっている。つまりそれまでの移民は、英語圏外のものでも、英語を話そうとしたし、話せない場合でもなんとかその努力を行った。また、それまでの最大のマイノリティ集団である黒人は、英語は話せたのである。しかし、ヒスパニックは、その数の巨大さと、地域的近接性が、巨大なスペイン語ネットワークを作っているのである(2)。しかし彼等は、忌むべき、適応しない、同化しないものとして、英語を話さなければならないのだろうか。ここでは、英語帝国主義という思想をみることにする。

英語帝国主義

英語帝国主義は、言語主義（Lingucism）から生じる。言語主義とは、「言語によって規定されるグループ間の物質的、非物質な資源と権力の不平等な分割を正統化し、それを有効化し再生産するための構造とイデオロギー」である［Phillipson, 1988:339］。この中で重要なのが、国際的言語のヘゲモニーとしての英語の役割である。フィリィプソンは、植民地主義と言語主義を考察することにより、第三世界において英語帝国主義が成立していることを実証する。また国内的、対外的な植民地主義の結果として、先住者や、移民マイノリティーは、言語主義の犠牲者であるという。

これが、他の国なら問題はないが、メキシコはアメリカに近接し、従属した発展途上国である。植民地主義の結果として彼等も英語を話さなければならな

いのであろうか。

彼等がスペイン語を使うのは、何ほどかの意味があるのではないだろうか。

筆者は５年前メキシコの北部国境の町ティファナに行き、穴だらけの国境のフェンスの中で、Para Los Angeles（ロスアンジェルスへ）と書かれた、誰が作ったかわからない入口を通って、アメリカへ不法入国した。

それは、 1986年５月４日の日没前であり、その丘には500人ぐらいの不法入国の男達がいたであろうか。空には白い国境パトロールのヘリコプターがしつこいぐらいに回っていた。日が暮れると彼等は、北へ、ロスアンジェルスへ移動するのである。私は何枚か写真を撮ったが、彼等の態度は平然としていた。考えてみれば、そこの地は、1848年のメキシコ・アメリカ戦争まではメキシコの領土だったのである。Los Angeles も、天使達という意味のスペイン語である。数日後、メキシコの友人と合法的にアメリカに入国し、サンディエゴに行ったが、スペイン語ですべての用をたそうとする友人と、英語で話す自分の方が妙であった。

言語にたいする権利は人間的権利である［Hernandez-Chavez,1988:45］。

それでは、アメリカの言語状況はどのようなものであろうか。

1923年ネブラスカ法というものがあり、 一般的な言語（common tongue）を使うことが望ましいという決定があった。同時に第一次世界大戦の反ドイツ感情もあり、英語以外のいかなる言語も８年生以下には教えてならないという決定が、21の州においてなされた。 そして50年後、1970年カリフォルニア最高裁判所は、単一言語システムは維持すべきであり、スペイン語を選挙時に用意する必要はないと決定したが、その３年後、1973年、カリフォルニア州議会は、教育と選挙に対する２ヵ国語 （ bilingual ） システムを決定したのであった［Hernandez-Chavez,1988:46］。

こうして二ヵ国語教育が現実のものとなったが[3]、 考えてみれば、二ヵ国語教育を生み出すまでの力を、それまでの移民は持っていたであろうか。

以上、経済的不平等を認めつつも、文化的同化の問題も、否定できないのである。

4．ホスト社会への参加

前章では、文化的同化の批判として、経済的不平等があるという学説史的整理を行ったが、それと同時に、同化理論に対して、新しい言葉として出てきたのが、エスニック・アイデンティティという言葉であった。アイデンティティの言葉そのものは、エリクソンの青年期の研究から出てきたものだが、その言葉のもっている象徴的語感から容易に使用されるようになり、エスニック・アイデンティティもその一例である。エスニック・アイデンティティの言葉のあいまいさは別として、ここでは、それを越えるものとして、バディージャ［Padilla,1985］の研究をみることにする。

前章では、同化理論や、それに対する批判をみてきた。そこで得られた結論は、ヒスパニックは、下層労働移民というよりも、言語的な、すなわち文化的統一性をもった、それまでとは異なった移民であることを示した。それでは、ヒスパニックとは、言語的アイデンティティだけで、一括できる存在なのであろうか。たとえば、メキシコ系とプエルト・リコ系は、同じスペイン語を話す存在としても、彼等は同じエスニック集団と考えているのであろうか。

バディージャも種々の研究をもちだし、言語がエスニック・アイデンティティの非常に重要な要素であることに同意する。しかし、彼が意図したことは、それだけにとどまらなかった。バディージャは、1970年初期、シカゴでおこった、メキシコ系アメリカ人とプエルト・リコ系が同じスペイン語を話す集団として、アファーマティブ・アクションに基づいて社会運動を行った過去の事例を分析することによって、これらの諸問題に新しい展望を持ち出した。分析した具体的運動は次のようなものである。

公式統計によると、1970年にシカゴにいたヒスパニックは、24万7857人であり、その内43％が、メキシコ系アメリカ人であり、32％がプエルト・リコ系であった［Padilla,1985:56］。

1971年の時点で、イリノイ・ベル電話会社の従業員４万4000人の内、ヒスパニックは300人以下であったという。“雇用を求めるヒスパニック連合”の指導者達は、何度も会社の幹部と話し合った。そして、1971年８月17日の話し合いによって、指導者達は、３年間に3000以上の雇用を要求した。1971年９月15

日、しかし幹部は、115の仕事を与える以外何の要求ものまないとした。そこで次の日、最初のデモンストレーションをヒスパニックはした。約100人の連合の人々が、電話会社にヒスパニックに対する差別があるというデモンストレーションを行い、その内の50人が会社の一階に入ってデモンストレーションを行ったのである。この行動は、新聞によって、センセーショナルな形で報道された。この具体的な抗議という形をとった戦術が、それまでの連合の不利な交渉の状況を逆転させた。そして1972年6月14日、イリノイ・ベル電話会社は、1976年の終わりまでに、少なくとも1323人のヒスパニックを雇うという協定にサインをしたのだった［Padilla,1985:94-96］。

重要な点は、ここでは割愛したが、この“雇用を求めるヒスパニック連合”の形成過程である。メキシコ系アメリカ人とプエルト・リコ系が同じスペイン語を話す集団として連帯するまでには、相当の紆余曲折があった。また、参加人数が少ないという感想を持たれるかもしれないが、ここには、バディージャのもう一つ意図した、アリンスキーモデルを使った社会運動のリーダーシップ理論も存在する。

この運動は、1970年代初期のアメリカであったということを、充分考慮しなければならないが、その過去の運動を分析することによって、バディージャの主張することは、同一言語によるエスニック・アイデンティティよりも、もっと広範な、運動に基づいた“エスニックとしての自覚”（Ethnic Consciousness）である。強調したい点は、ただ彼等が静態的に同一言語によって、アイデンティティをもつものではなく、具体的な運動を通して、動態的に“エスニックとしての自覚”を持つことである。

ここでみた事例は、同化やそれに対抗したアイデンティティの主張よりも、より重要なのは、そういった静態的分析よりも、動態的に、社会運動を通じて得られる、エスニックとしての自覚や連帯こそ重要であるという点であった。

結論的に述べるならば、同化やアイデンティティに対する新しい概念は、エスニックの自覚に基づいた社会運動ではないか。なぜなら、社会運動は、言葉を換えて言えば、ホスト社会にたいする社会参加であるからだ。彼等が、バリアーをもって、地域コミュニティの枠を出ないとき、彼等は、異質な存在として生き続ける。しかし、彼等が、社会運動をもってホスト社会積極的にコミッ

トメントすることによって、彼等も変わるし、ホスト社会も変わる。エスニックな集団は、運動を通じることによって、閉鎖的な生活態度を改め、よりそのホスト社会そのものの未来を考えるであろう。言葉を換えていえば、彼等は運動を通じて社会適応をし、同化もするのである。

5．おわりに

これからの、移民地球社会のとるべき一つの選択として、国際地域社会の構想とでも呼ばれるものが考えられるのではないか。

まず、ヨーロッパの場合を考えてみると、ＥＣ統合には種々の要因があると考えられるが、その要因の一つに域内労働者の移動の自由の確保があげられる。ヨーロッパの移民というと、たとえばフランスのマグレブ移民あるいはドイツのトルコ人をすぐさま連想するかもしれないが、これらの国々に圧倒的に多い移民は、実はイタリア人なのである。これら域内労働者の移動の自由もＥＣ統合の大きな目的である。

さて、今年に入ってアメリカとメキシコの間に重要な経済関係の変化がみられることとなった。これは、北米自由貿易協定が今年中に大筋まとまる見通しになったことである。すでに、アメリカとカナダは自由貿易協定を締結しており、今年２月５日、アメリカのブッシュ大統領、メキシコのサリナス大統領、カナダのマルルーニー首相が、北米自由協定を目指し交渉に入ると宣言したのである。もしアメリカ、メキシコ、カナダ三国による自由貿易圏が成立すると、ＥＣを上回る人口３億６千万人、生産額６兆ドルの規模になるという。これには、労働者の移動の自由はないのだが、将来この地域の経済的、政治的結び付きが強くなるのは間違いない。

アジアにおいても、これら世界的動向は、将来にわたっては、決して無視できない傾向であると考えられる。

〈注〉

（1）この法の効果について、メキシコ側から調査したものに、［Gonzalez, 1990］がある。

（2）これについては、［Center for Urban and Regional Studies of Claremont Graduate School］の詳細なレポートを参照されたい。

（3）この二カ国語教育の具体的実態については、［Baca,1989］を参照されたい。

〈文献〉

明石紀雄・飯野正子・田中真砂子　1984　『エスニック・アメリカ』有斐閣。

Acosta-Belen,Edna and Sjostrom,B.R. (eds.)　1988　The Hispanic Experience in the United States, Prager Publishers.

Baca,R. and Bryan,D. and Mclean-Bardwell,C and Gomez,F.　1989 "Mexican Immigration and the Port-of-Entry School" International Migration Review, Vol.23 No.1

Bustamante,Jorge A.,　1980　Immigrants from Mexico:The Silent Invasion Issue,in Roy Simon Bryce-Laporte,Sourcebook on the New Immigration, Transaction Books.

Center for Urban and Regional Studies of Claremont Graduate School, The Role and Function of Spanish-Language-only Television in Los Angeles.

Edwards,C.,Richard (ed.)　1975　Labor Market Segmentation, Lexington Books.

Glazer,N. and Moynihan,D.P.　1968　Beyond the Melting Pot, The M.I.T. Press.=1986　阿部斉、飯野正子訳、『人種のるつぼを越えて』南雲堂。

Gonzalez,Mercedes de la Rocha y Escobar,Agustin Latapi 1990 "La ley y la internacional:el impacto de la-Simpson-Rodino- en una comunidad de los Altos de Jalisco" en Estudios Sociologicos (El Colegio de Mexico) Vol.8 Num.24

Gordon,M.David　1972　Theories of Poverty and Under Employment, Lexington Books.

Herberg,W.,　1955　Protestant-Catholic-Jew.

Hernandez-Chavez　1988　Language Policy and Language Rights in the United States,in Skutnabb-Kangas,T. and Cummins,J. (eds.) Minority Education:From Shame to Struggle, Multilingual Matters.

Padilla,F.M.　1985　Latino Ethnic Consciousness, University of Notre Dame Press.

Phillipson,Robert 1988 Linguicism:Structures and Ideologies in Linguistic Imperialism, in Skutnabb-Kangas,T. and Cummins,J. (eds.) Minority Education:From Shame to Struggle, Multilingual Matters.
Piore,M.J. 1979 Birds of Passage:Migrant Labor and Industrial Societies, Cambridge University Press.
Portes,A. and Walton,J. 1981 Labor,Class, and the International System, Academic Press.
Portes,A. and Bach,R.L. 1985 Latin Jorney:Cuban and Mexican Immigrants in the United States, University of California Press.
Sassen,Suskia 1988 The Mobility of Labor and Capital:A Study in International Investment and Labor Flow, Cambridge University Press.
United States Bureau of the Census. 1991 15 Apr. US Census Data 18:58:59 GMT Hispanics in the USA.

〈付記〉
メキシコ北部国境研究所所長のフォルフェ・ブスタマンテ博士に感謝する。また、その国境研究所の客員研究員の地位を、留学生の身分でありながら確保してくれた、メキシコ大学院大学の田中道子先生に厚く感謝したい。

（てらもと　しんすけ／飯田女子高校）